

続・保育の中の小さなこと大切なこと ①

守 永 英 子

このテーマで、以前この雑誌に小文を書いたのは、もう四年も前のことになるであろうか。今回は、「続」として同じテーマで書くようにとのことなので、以前のものを読み返してみた。そこに載せたエピソードの一つ一つに、その時の自分の緊迫感がよみがえってくる。現在の自分の保育にも、これだけの緊迫感があるであろうか。少々不安になって思い返してみると、当時は、三歳児、或は、新入園児を半分加えた四歳児の担任であった。現在は、一年又は二年を共に過ごした五歳児を担当している。その点で、前回と感触の違いがあるのかもしれない。

年長児のクラスといっても、なりたての四、五月では、まだまだ自分を出し切れない子ども達もいる。Y子もその一人で、生れもおそく、友だちのあとについて遊べるようになってはいるものの、いろいろな面でまだ消極的である。昨年、私の誘いかけにも、「へただからしない」と云うことも

多かった。

年度初めに、子どもの誕生月を示すものを作った時も、Y子は、自分からしようとはしなかった。しかし、ほとんどの子どもが作ってしまい、最後に残った二・三人の子どもを誘った時には、Y子は、思いがけずスムーズに参加してきた。私をほっとさせた。同じ机で、三・四人の女の子が絵を書いていて、Y子がやり始めるのにはよい状況と思われた。Y子の絵が少し形を成してきた時、隣にいたN子が、それを見て、「変なの」と大声をあげた。

N子は、入園当初から、まとまった絵をかき、自分でもそれを意識しているようであった。性格の強い子どもで、人に指すけとものをいうところもある。Y子のものじもじした様子に、とっさに私の気持はY子をかばう側に立っていた。「どうして変なの？」と聞く私に、N子は、平然と「だって、こんな大きな顔なんてないもん」と答えた。確かに、Y子の

書いている女の子の顔は大きく、その線を書き始めた時には、私もはっとしたのである。しかし子どもなりのバランスで、その絵は、丁寧になじりかけていた。

Y子の気持を動揺させたくない。私は、あわてて、言葉を探した。「でも、かわいいお人形さんで、よく大きな顔してるわ。赤ちゃんだつて顔大きいし。それに、お洋服がきれい。丁寧に書いているから。」こう云いながら、私の力では補いきれないものを感じ、他の子どもたちにも声をかけた。

「Y子ちゃんの絵がきれいだと思う人？」できるだけ軽い調子で、N子に強くひびかないようにとの心使いはしたつもりであった。近くで絵を書いていたM子たちが、成行きに気づいていたらしく、自分の活動を続けながら黙って手をあげて、私の気持に応えてくれた。「お友だちも、きれいって言って下さってよかったわね。」ほっとした私の気持を受け取ったかのように、Y子は、にっこりして、絵を書き続けた。

一人の子どもの、事実に基づいた発言も、時として、他の子どもを傷つけることがある。N子の場合も、強者の弱者に対する態度を含んでいと思われるものの、確かに、N子自身身が事実と感じたことを言ったのである。

そこに、私は、むずかしさを感じた。「そう思っても、お友だちにそんなこと言わないのね」と言ってしまうことはやさしい。しかし、N子の心に、その言葉が、しみこむとは思えないし、それに、「感じたことを口に出す」という行為そのものを押えてしまうことに、やはりちゅうちゅうがあった。まして、Y子の自信回復にはつながらない。

このような思いに迷いながら、Y子をかばうことに焦点をおき、N子の強さとY子の未熟さを考えて、M子たちの助力を求めて、その場の力のバランスをとった。そして、N子に対しては、「大きい」というN子の批判を否定せずに、同じ「大きい」ということから、N子とは違った感じ方があること、Y子を支えてくれたM子たちのやさしさが、Y子や私を含んだ輪の中でもし出すもの、N子自身の心ない発言が起こした気まずさ——などを感じとってほしいと願ったのである。

その時、N子が何を感じ取ったかは、定かではない。しかしその不明確なものが、現実には、子どもを育てているのだと思う。私の願ったものが、私のとった方法の中で通じたかどうか、それは、子どもが育つ姿の中で私自身が気づかなければならないものであろう。(お茶の水女子大学附属幼稚園)